

『噂の二人』 The Children's Hour 1961 米 B & W 107mins.

製作・監督：William Wyler

原作：Lillian Hellman

Lillian Hellman 小田島雄志 (訳) 1995『リリアン・ヘルマン戯曲集』新潮社

(人文学部英文学科助教授)

Maryの作り話であったとわかったときには、すぐに自ら謝罪に訪れ、謝罪を公表し、賠償もすると申し出ている。それを「金で解決」と受け取る論調はKarenが言ったせりふなのである。つまり、「しまいには金で解決しようとするなんて」、「買収しようとした」という感想は、Maryの祖母を誤解したばかりか、「美しく魅力的な」Hepburn演ずるKarenの言うことは鵜呑みにされたことが示唆される。Hepburn演ずる役柄に、Hepburnという女優に対して抱えているイメージが持ち込まれてしまっているのではないだろうか。

視聴後に「メアリの耳打ちの内容」を質問された群は、祖母に対する偏見が少なかった。質問によってHepburnのイメージが大きく変わったわけではない。「メアリは何と耳打ちしたか」と質問することによって、孫の並べる言い訳にはじめは取り合わなかった祖母が耳打ちで態度を急変させたことに注意を喚起することになり、Hepburnのイメージはそのままで、Maryのうその巧妙さ・祖母の慎重さなどを含めて解釈を整えたものと思われる。

また、Hepburnについては美しさや気品、演技などを称えた感想がみられたが、ほかの登場人物についてはMary役の憎々しげな演技力以外、ほめた感想はなかった。KarenとMarthaを追い詰めた原因には、Marthaのおばのいいかげんさもひと役買っているのだが、Marthaのおばに言及した者はひとりもいなかった。Marthaのおばの役割についても質問などによって注目させれば、さらに内容の理解が深まったのではないだろうか。

この実験において、質問は映画をすべて視聴し終わったあとに行った。Hepburnのイメージについて、質問の有無の主効果が有意だった形容語対は1対に過ぎず、質問によるイメージの差異はほとんどみられなかった。つまり質問あり群は、質問を受けたことによってこの質問に関わるシーンが重要なキーになることに気づき、視聴後に全体をもう一度さかのぼって再解釈した結果、誤解を減らしたのである。本来ならば、映画を視聴している最中にリアルタイムで、要所にきちんと気づいて細かいところまで見落とさずに一貫した解釈を構成していくことが深い鑑賞につながるはずである。

今回の被験者にとってHepburnのイメージは大きく、内容の理解にも影響を与えたことが示された。ただし、存在感が大きいとしても女優のイメージと作中の役柄イメージを混同して解釈が歪んでしまうというのは、読みとりのスキルの問題として今後さらに考える必要があるだろう。

引用文献

福沢周亮 藪中征代 蜂巢美穂子 野口松雄 1999 顔を読む—オードリー・ヘップバーンのイメージ— 日本読書学会第43回研究大会発表資料集 p. 107-113.

表5 Maryに対する否定的な記述の有無

		あり	なし (人)
質問なし		16	41
質問あり		12	45

$\chi^2 = .757, n.s.$

表6 Karen/Hepburnを称える記述の有無

		あり	なし (人)
質問なし		15	42
質問あり		19	38

$\chi^2 = .671, n.s.$

4. 考 察

イメージ評定について、質問の有無の主効果がみられたのは「強い—よわい」の1対のみで、質問なし群のほうが「強い」と受け取る傾向が示された。

映画視聴の前後では「小さい→大きい」、「うれしい→かなしい」、「陽気な→陰気な」、「女性的→男性的」、「活発な→不活発な」、「軽い→重い」、「たのしい→くるしい」、「やわらかい→かたい」、「明るい→暗い」、の9対について変化がみられた。映画を見るまでのイメージは、『噂の二人』におけるKarenの役柄よりも軽快で明るいものであったことがわかる。一般的にいかかわいく明るく楽しい感じのお人形的イメージでみられていたのである。それが、『噂の二人』を見たことによって、純粹できれいで好ましい人というイメージはそのまま、しんの強い人物像に変化したことが明らかになった。

感想の分析からは次のようなことが示された。

Maryの祖母は厳格で、できるだけ公正であろうとしている人物として描かれている。ところが、質問なし群では1/4近くの者が祖母に関するこのような描写を見落とし、誤った祖母像を作っていた。Maryの祖母は、Maryの訴えをすぐに真に受けたというわけではない。冒頭に、Maryがきわどい内容と思われる怪しげな本を消灯時間以降にベッドの中で隠れ読んでいるという描写がある。Maryのうそは巧妙であり、その本から仕入れたらしい知識によって、「見ていなければ子どもには言えないはずのこと」を言ってみせたことにより、とうとう祖母もだまされてしまったのである。

その後も、祖母の態度はむしろ誠実であろうとしている人のものといえる。すべては

発な—不活発な」、8「軽い—重い」、13「たのしい—くるしい」、16「やわらかい—かたい」、17「明るい—暗い」の9対であった。表3には、視聴によって変化した方向を形容語間の矢印にて示した。

また、質問の有無の主効果が有意だったのは、4「強い—よわい」のみであった。交互作用が有意だったのは8「軽い—重い」、13「たのしい—くるしい」であり、図3、図4に示した。

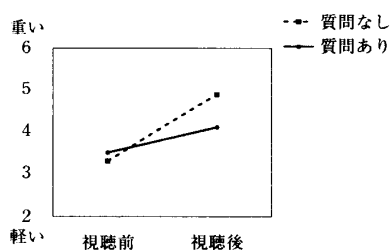


図3 評定値の平均「軽い—重い」

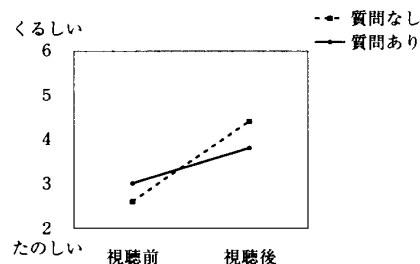


図4 評定値の平均「たのしい—くるしい」

③ 感想

感想の中に、Maryの祖母についての不当に否定的な記述を含む者を数えた。

具体的には「孫かわいさにうそを信じ込んだ」、「孫の言うことを鵜呑みにするなんて許せない」、「メアリの祖母は大甘でやなやつ」、「しまいには金で解決しようとするなんて」、「買収しようとした」といったものであり、映画の描写に照らすと誤っているものである。

表4に示したようにこのような誤解は質問なし群に多く、 χ^2 検定の結果有意差があった ($\chi^2=8.4, p<.01$)。

表4 祖母 (Mrs. Tilford) に対する否定的な記述の有無

	あり	なし (人)
質問なし	14	43
質問あり	3	54

また、Maryに対する否定的な記述 (表5参照)、KarenまたはHepburnを称えるような記述 (表6参照) についても調べ、同様に χ^2 検定を行ったが、質問の有無による有意差はなかった。

また、感想の中でMarthaのおばに言及した者は、両群ともにひとりもいなかった。

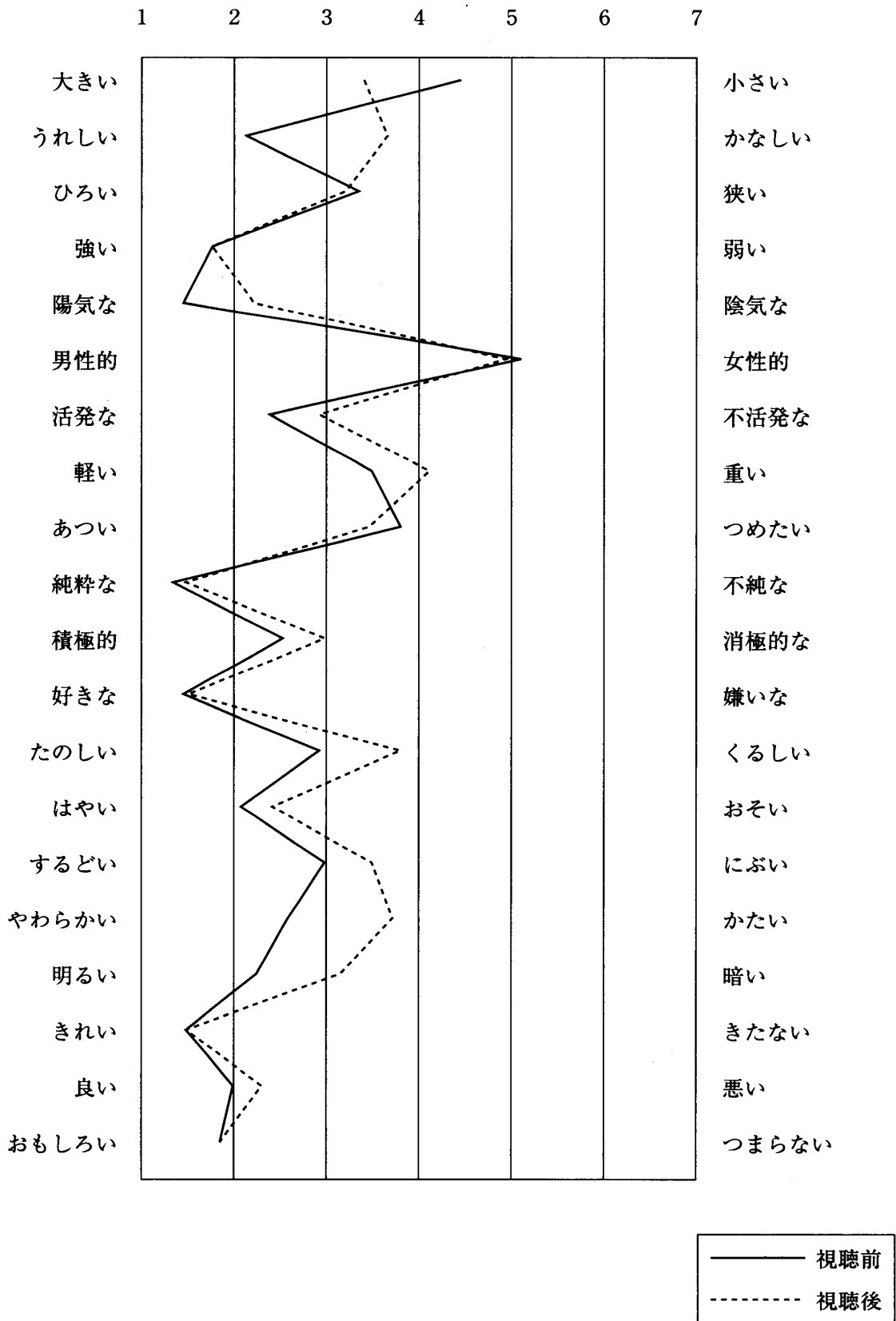


図2 質問あり群のプロフィール

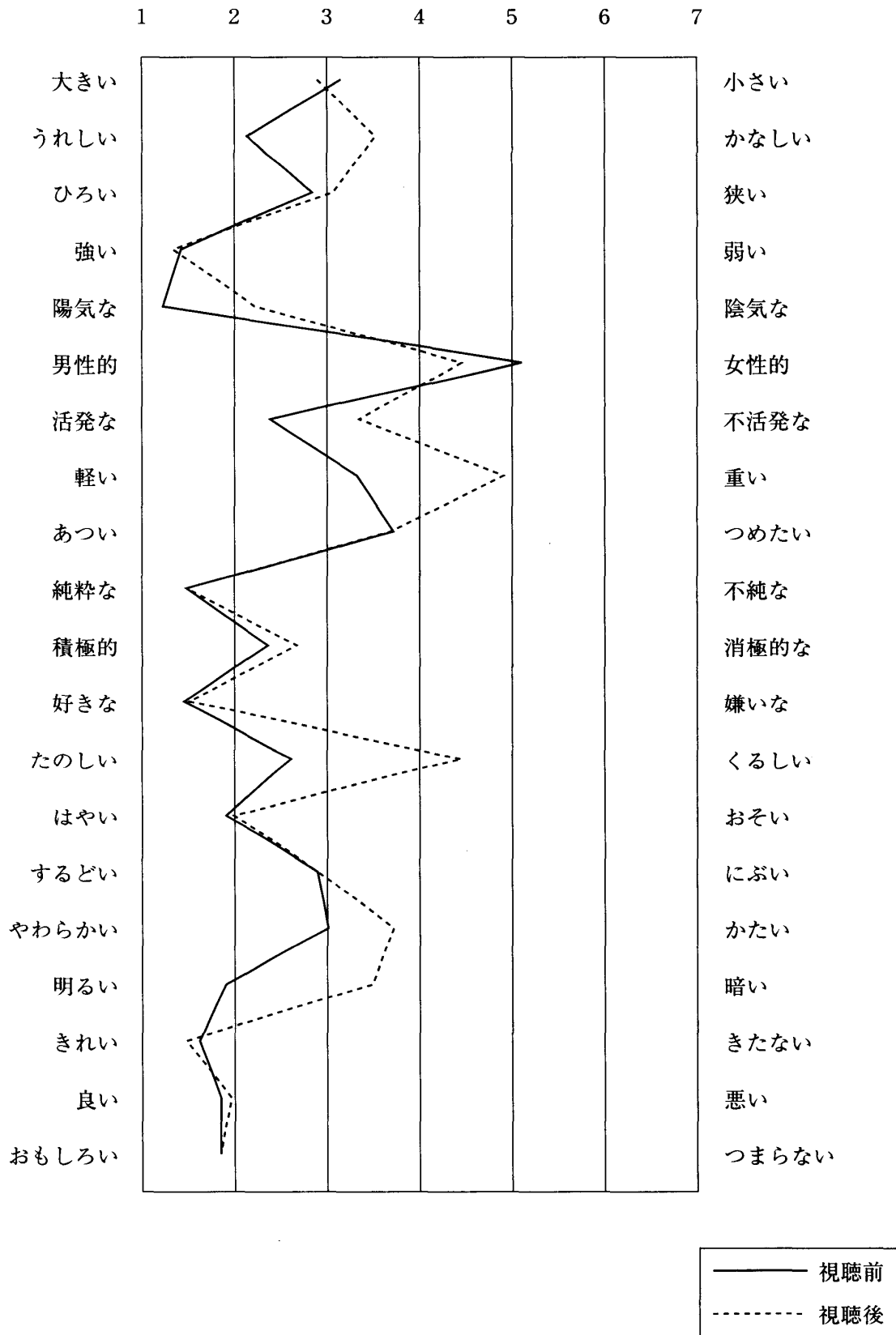


図1 質問なし群のプロフィール

表3 評定値の平均と標準偏差および分散分析の結果

		視聴前		視聴後		視聴前後の 主 効 果	質問の有無 の主 効 果	交互作用
		m	SD	m	SD			
1	大きい←小さい	質問なし	3.1	2.0	2.9	2.0	F = 14.1**	
		質問あり	4.4	2.1	3.4	1.8		
2	うれしい→かなしい	質問なし	2.1	1.6	3.5	1.4	F = 52.9**	
		質問あり	2.1	1.4	3.6	1.6		
3	ひろい—狭 い	質問なし	2.8	1.3	3.0	1.9		
		質問あり	3.3	1.7	3.1	1.6		
4	強 い—弱 い	質問なし	1.4	1.4	1.3	1.2	F = 4.9*	
		質問あり	1.7	1.5	1.7	1.4		
5	陽気な→陰気な	質問なし	1.2	1.0	2.2	1.5	F = 25.5**	
		質問あり	1.4	1.2	2.1	1.3		
6	男性的←女性的	質問なし	5.1	1.2	4.5	1.7	F = 5.9*	
		質問あり	5.1	1.3	4.7	1.6		
7	活発な→不活発な	質問なし	2.4	1.3	3.3	1.5	F = 18.3**	
		質問あり	2.4	1.2	2.9	1.2		
8	軽 い→重 い	質問なし	3.3	1.6	4.9	1.6	F = 25.9	F = 5.7*
		質問あり	3.5	1.7	4.1	1.6		
9	あつい—つめたい	質問なし	3.7	1.8	3.5	1.6		
		質問あり	3.8	1.5	3.5	1.7		
10	純粹な—不純な	質問なし	1.4	1.1	1.4	0.9		
		質問あり	1.3	1.1	1.4	1.0		
11	積極的—消極的	質問なし	2.4	1.5	2.6	1.6		
		質問あり	2.5	1.3	3.0	1.5		
12	好きな—嫌いな	質問なし	1.4	0.9	1.5	1.0		
		質問あり	1.4	1.1	1.4	1.0		
13	たのしい→くるしい	質問なし	2.6	1.3	4.4	1.9	F = 37.4**	F = 5.1*
		質問あり	3.0	1.6	3.8	1.6		
14	はやい—おそい	質問なし	1.9	1.6	2.0	1.3		
		質問あり	2.0	1.4	2.4	1.4		
15	するどい—にぶい	質問なし	2.9	1.3	3.0	1.4		
		質問あり	3.0	1.5	3.5	1.6		
16	やわらかい→かたい	質問なし	3.0	1.9	3.7	2.0	F = 14.9**	
		質問あり	2.6	1.3	3.7	2.0		
17	明るい→暗い	質問なし	1.9	1.0	3.4	1.7	F = 35.3**	
		質問あり	2.3	1.6	3.2	1.7		
18	きれい—きたない	質問なし	1.6	0.7	1.4	0.9		
		質問あり	1.5	0.7	1.5	0.9		
19	良 い—悪 い	質問なし	1.8	1.1	2.0	1.2		
		質問あり	2.0	1.1	2.3	1.4		
20	おもしろい→つまらない	質問なし	1.8	1.3	1.8	1.3		
		質問あり	1.9	1.4	1.9	1.2		

** : p < .01
* : p < .05

- ② 福沢らの用いた20対の形容詞・形容動詞対（表3参照）によって、写真の人物についてのイメージを7段階評定させた。
- ③ 映画『噂の二人』をスクリーンに映写し、視聴させた（107分）。
- ④ 質問あり群にのみ、「家に逃げ帰ったMaryが学校へ連れ戻されるシーンにおいて、車の中でMaryは祖母に何と耳打ちしたと思うか」と質問し、答えを書かせた。
- ⑤ 視聴前と20対の形容詞・形容動詞対を用いて、再度Hepburnのイメージを評定させた。
- ⑥ B5版の用紙を配り、映画の感想を自由に書かせた。
- ⑦ 身近にHepburnのファンがいるか、Hepburnの映画をこれまでに見たことがあるかなどについての質問紙に回答させた。

3. 結 果

① 知名度

100%の被験者がAudrey・Hepburnの名前を記していた。

また、質問なし群の56.1%、質問あり群の64.9%が身近にHepburnのファンがいると回答していた。

また、Hepburnの出演する映画をこれまでに見たことがあるかについては、表2にまとめた通り、質問なし群・質問あり群ともに半数が『ローマの休日』を挙げた。

表2 Hepburn出演映画を見たことのある者の数（延べ人数）

	質問なし群	質問あり群
『ローマの休日』	29	29
『ティファニーで朝食を』	16	13
『マイ・フェア・レディ』	4	4
『麗しのサブリナ』	3	4
その他	『シャレード』/『おしゃれ泥棒』/『パリの恋人』各1	『おしゃれ泥棒』1

② イメージ評定

評定値の平均と標準偏差は表3にまとめた通りである。平均のプロフィールを図1（質問なし群）、図2（質問あり群）に示した。

評定値に関して2（映画視聴の前後）×2（質問の有無）の分散分析を行った（結果は表3に合わせて示した）。その結果、視聴前後の主効果が有意だったのは、1「大きい—小さい」、2「うれしい—かなしい」、5「陽気な—陰気な」、6「男性的—女性的」、7「活

が自分勝手な厄介者である。Maryのうそにも簡単にだまされ、だまされたことがわかると手のひらを返すようにMaryをののしったりする。KarenとMarthaは、このおばに出て行ってもらおうと話し合っている。

ある日、Maryはうそをついたことを叱責され、罰を与えられて学校を飛び出し家に戻ってしまい、先生たちが自分のことを不当に扱っていると祖母（父母は不在）に訴える。ところが祖母は、「先生方は信用できる、罰を受けるのは相応のことをしたからでしょう」と言って、すぐに学校へ車で連れ戻そうとする。Maryは学校に戻らずにすむよう、祖母にいろいろと訴えてみるうち、KarenとMarthaは“unnatural”な関係だと言う。これはMarthaのおばがMarthaに向かって口にしたことばで、Maryは同室の子たちが立ち聞きしたのを又聞きしたのである。このことは、Maryが同室の子にも悪影響を与えているという描写にもなっている。

祖母はにわかには信じないが、Maryが耳元に口を寄せてなにやら囁いたのを聞いて顔色を変え、車を方向転換させてMaryを連れ帰る。

“同性愛”の噂はあっという間に広がり、保護者はみな子どもたちを引き上げさせ学校は閉鎖に追い込まれる。Maryは、ばれそうになっても盗癖のある子を脅して味方につけるなど巧妙に立ち回ってうその上塗りをする。

KarenとMarthaは名誉毀損の訴訟を起こすが重要な証人となるべきMarthaのおばも出廷せず敗訴、Joe Cardinと婚約中だったKarenは婚約を解消する。誰もいなくなった学校にKarenとMarthaだけが残る。

このときになってようやくMaryのうそが祖母にばれ、祖母は学校を訪れて謝罪し、賠償を申し出るが、Karenは賠償も拒否する。Marthaのおばも戻ってくるがときすでに遅い。KarenはMarthaに別の土地でやり直そうと言うが、Marthaは自分が実はKarenによこしまな想いを抱いていたのかもしれない、自分は“guilty”なのだと言い、自殺してしまう。

ラストはMarthaの葬儀、誤解の解けたらしい人々が遠巻きに見守っている。Karenはひとり顔をまっすぐに上げて立ち去る。

〈被験者〉

短大生女子114名。57名ずつの2群に分け、質問なし群と質問あり群にあてた。

〈手続き〉

- ① Audrey Hepburnの写真2葉（『ローマの休日』・『サブリナ』のもの、福沢ら（1999）の用いたものと同じ）をスクリーンに投影し、知っていたら名前を書くよう指示した。

表1 Hepburn出演作品の一部

『ローマの休日 Roman Holiday』	1953
『麗しのサブリナ Sabrina』	1954
『戦争と平和 War and Peace』	1956
『パリと恋人 Funny Face』	1957
『昼下がりの情事 Love in the Afternoon』	1957
『許されざる者 The Unforgiven』	1959
『尼僧物語 The Nun's Story』	1959
『ティファニーで朝食を Breakfast at Tiffany's』	1961
『噂の二人 The Children's Hour』	1962
『パリで一緒に Paris when it Sizzles』	1963
『シャレード Charade』	1963
『マイ・フェア・レディ My Fair Lady』	1964
『おしゃれ泥棒 How to Steal a Million』	1966
『暗くなるまで待って Wait until Dark』	1967
『いつも2人で Two for the Road』	1967
『ロビンとマリアン Robin and Marian』	1976
『オールウェイズ Always』	1989

出演：

Audrey Hepburn ……Karen Wright
 Shirley MacLaine ……Martha Dobie
 James Garner ……Doctor Joe Cardin
 Miriam Hopkins ……Mrs. Lily Mortar
 Fay Bainter ……Mrs. Amelia Tilford
 Karen Balkin ……Mary Tilford
 Veronica Cartwright ……Rosalie

このうち、Shirley MacLaineについては福沢らがHepburnと同時に知名度を調べている。結果は、「名前だけは知っている」が44%、「顔と名前が一致する」は1.8%に過ぎなかった。あらすじ：寄宿制私立学校を経営するふたりの女性—Karen (Audrey Hepburn) とMartha (Shirley MacLaine) が、突然“同性愛”という汚名を着せられ、やがて悲劇的な結末を迎える。

Karen (Audrey Hepburn) とMartha (Shirley MacLaine) は、ふたりで寄宿制私立学校を経営している。原作 (Hellman, 1995) によると生徒は12~14歳という設定である。

生徒のMaryは、しばしば規則を破ったり、うそをついたりしている問題児である。MarthaのおばMrs. Lily Mortarも教師のひとりとして学校に住み込んでいるが、元女優な

オードリー・ヘップバーンのイメージが 映画鑑賞に与える影響

村 田 夏 子

1. 問 題

Audrey Hepburnは知名度も高く、日本人に人気のある女優である。福沢ら(1999)はHepburnについて大学2年生の女子が抱いているイメージを調べ、被験者の100%が「顔と名前が一致する」と回答したうえで、清潔感と上品さを高く評価していることを示した。

筆者は先に、短大生約120名に『噂の二人』を視聴させ感想を書かせるという機会があった。その際、Hepburn演ずる役柄には好意的である一方で、ほかの登場人物については否定的な誤解がみうけられたのである。Hepburnの作品における活躍は、表1に示した通り50～60年代が中心である。このとき『噂の二人』を視聴した者たちにとってHepburnの知名度は高くても、実際には映画などをあまり見たことはなく、CMや評判を通して格別に良いイメージのみが浸透しているのではないか。『ローマの休日』で演じた王女という役やUNICEFのspecial ambassadorとしての活動なども良い意味でHepburnのイメージに影響していると思われる。このような事情により、先行するHepburnのイメージに引きずられて映画内容の理解が影響を受け、歪んでしまったのではないかと考えられた。

そこで、Hepburnのイメージに焦点を当て、実験をして調べてみることにした。このとき、途中のある1シーンについての質問をする群を設け、Hepburnのイメージおよび内容の理解がどのように変わるかについて調べた。

2. 方 法

〈材料〉

映画『噂の二人 The Children's Hour』を用いた。

製作・監督：William Wyler